

C-21 肺癌縮小手術の評価—高齢者および poor risk の非小細胞肺癌に対する合理的縦隔リンパ節郭清に関する検討

村岡 昌司¹・岡 忠之¹・赤嶺 晋治¹・田川 努¹・永安 武¹・生田 安司¹
井上 征雄¹・田川 泰¹・綾部 公懿¹

¹長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 腫瘍外科；²長崎大学 医学部 保健学科

【目的】高齢者および poor risk の非小細胞肺癌患者に対する術中迅速病理検査（以下 frozen）を用いた選択的リンパ節郭清について検討する。【対象と方法】対象は 70 歳以上の高齢者（19 例）と心（5 例）、肺（16 例）、他臓器（3 例）に合併症を有する非小細胞肺癌 43 例で、臨床病期は IA 期 17 例、IB 期 21 例、II B 期 1 例、III A 期 4 例であった。術式はすべて肺葉切除とし、過去のデータより原発肺葉別に設定した Sentinel Node（以下 SN）（右上葉 #3, 4, 10, 中葉 #4, 7, 10, 左上葉 #5, 6, 10, 両下葉 #7, 10, 11）と術中に転移が疑われた腫大したリンパ節を合わせて frozen に提出し、陰性の場合には他の縦隔リンパ節郭清を省略した。手術侵襲と術後合併症と再発・予後についての中問解析を行った。【結果】frozen で転移陽性は 7 例（16%）で 6 例は ND2a の縦隔リンパ節郭清を施行、残る 1 例は下葉原発で #7 に転移を認めたが上縦隔に転移はなく ND1 とした。36 例は frozen を行ったリンパ節がすべて転移陰性で、SN 以外の縦隔リンパ節郭清を省略した。SN 以外のリンパ節では 22 例の 25 個が frozen され、転移陽性は 3 例（1 例は #12u 単独、2 例は同時に SN 転移陽性）であった。出血量は 232±153 g、手術時間 299±77 分、術後合併症は 16 例（37%）であったが重篤な症例はなく、術後入院期間は 16.2±6.8 日、術死・在院死はなかった。術後平均観察期間 22 カ月で再発は 6 例（14%）、うち局所・リンパ節再発は 2 例（4.5%）であった。病理病期 I 期であった 28 例の平均生存期間は 15.3±8.5 カ月で、死亡例は 2 例（他病死 1、癌死 1）であった。【結語】高齢者および poor risk の非小細胞肺癌に対しては、原発肺葉別に sentinel node concept に基づいたリンパ節の frozen を行うことで、84% の患者で縦隔リンパ節郭清を省略できた。特に病理病期 I 期の症例に対しては、根治度を損なうことなく、術死を含めた重篤な術後合併症の発生を減少できる可能性がある。

C-22 cStage I 肺野末梢非小細胞肺癌に対するリンパ節郭清の縮小と部分切除術の評価

吉岡 正一・森 毅・渡邊 健司・岩谷 和法・川筋 道雄
熊本大学 医学部 第一外科

【目的】胸腔鏡手術により、創の縮小は可能となったが、不必要な切除を避け、単純な術式でも根治性が得られる方法が求められている。そこで、術前画像診断および原発巣の術中凍結病理所見を基に、部分切除、あるいは上葉切除での #7 番、中・下葉切除での上縦隔郭清を省略した結果について報告する。【方法】1997 年 4 月から 2002 年 5 月までに切除した cStage I 非小細胞肺癌 135 例。腫瘍最大径が 5cm 以内では、VATS 葉切+ND2a を基本術式とした。腫瘍最大径 2cm 以内では、VATS 部切を行い、術中凍結病理診断で野口 AB 型であれば部切のみ、それ以外は葉切を追加。さらに、右上葉の #3・#4、左上葉の #4・#5・#6、下葉の #7 リンパ節に転移のないことが肉眼・凍結診断で確認できれば、上葉の #7、中・下葉の上縦隔リンパ節郭清を省略した。【成績】葉切+ND2 症例 67（ND 2 群）、葉切+ND1+α 症例 30（ND1+α 群）、単純葉切症例 19（ND0 群）、部切または区切症例 19（部区切群）。部切群の野口分類、ND1+α 群のリンパ節転移に関して、術中凍結診断の結果が永久標本で翻った症例はなかった。術前よりも病理病期が上昇したのは、ND2 群 15 例、ND1+α 群 3 例、ND0 群 4 例であった。上昇要因は、T 因子 10 例、N 因子 10 例、両因子 2 例であった。pm1 にて pT4 となったのが 4 例あったが、何れも cT2 であった。pN 陽性の 12 例では、cT2 が 9 例（75.0%）で、cT1 の 3 例は、ND2 群で pT2N2 の 1 例、ND0 群で pT1N1（#13 または #12LN）の 2 例であった。術後再発が 7 例にあり、ND 2 群 4 例、ND0 群 2 例、部区切群 1 例。ND2 群のうち 3 例は pN2 で、1 例は右中葉の SCC で ND2a を行い、pT1N0M0 であったが、#3aLN に再発したが担癌生存中。ND0・部区切群の再発 3 例は、何れも PS2 にて消極的縮小手術例。積極的縮小を行った ND1+α 群・ND0 群・部区切群の残り 65 例に再発はない。【結論】腫瘍径 2cm 以下の cStage I A 症例において、術中凍結組織診断に基づき症例を選択すれば、肺切除量の縮小やリンパ節郭清の縮小をしても、良好な予後が得られた。cT2 症例では、ND2 郭清が必要である。